



# 大学礼拝

Chapel News No.129-130

第129・130号合併号 東北学院大学 2014年9月30日

## 巻頭言



## 大学礼拝

宗教部長  
佐々木 哲夫

### 「知識の本」

「地の塩、世の光」「真理はあなたたちを自由にする」の言葉をキャンパスの中で見たことがあると思います。泉および多賀城のキャンパスの図書館に掲げられている聖書の言葉です。図書館のどこに掲げられているのか確かめてみてください。

さて、土樋キャンパスの中央図書館入口には、「エホバを畏るるは知識の本（もと）なり」（文語訳旧約聖書『箴言』一七）の聖句が掲げられています。新共同訳聖書では「主を畏れることは知恵の初め」と訳出されています。これらの言葉は、東北学院の建学の理念を示しています。ところで、知識の本とは具体的に何を指

している表現なのでしょうか。

漢学によって日本に移入された言葉に格物致知があります。その意味は「学問の眼目はこの世の道理を知ることであり、限りなく知ることによって世の中の事物はすべて自分のものになる」です。格物致知は、東北学院が創立された時代の日本における学問的価値観を表わす言葉の一つでした。他方、聖書は、この世の知識のすべてを知る（格物致知）だけではなく、その本を知ることの大切さを教えています。すなわち、格物致知を超越するものを知ることが知識の本であると説かれています。

知識の本について、新約聖書はさらに明示的に記述しています。例えば、エフェソの信徒への手紙に「人の知識をはるかに超えるこの愛を知る」（エフェソ三・一九）と記されてあります。知識の極限を超越して存在する愛を知ることの大切さです。「この愛」と表現されていますので、どのような愛なのかを文脈によって把握する必要があります。当該箇所の前後に「キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し」「ついに、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように」と記されています。知識の本とは愛を知ることであり、それはまた神を畏れることでもあるというのです。図書館に掲げられている聖句は、東北学院の教育の歴史と伝統を告げています。

# 「誰に雇われるか」

聖書 マタイによる福音書 第20章1～16節



横浜指路教会牧師

藤掛 順一

報酬なら、一時間しか働かなかった者と夜明けから一日中働いた者が同じ賃金というのは不公平です。しかしこの一デナリオンは、「わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ」という主人の、気前のよい、恵みに満ちた思いによって与えられているのです。神はそのようにして私たち皆に同じ一デナリオンの救いを与えて下さるのです。

信仰とは、神のぶどう園に雇い入れられて働くことです。そこに一デナリオンの救いが与えられます。夕方五時に雇われて一時間だけ働いて救いを得た人はラッキーだったのでしょうか。彼らは、雇ってくれる人を求めて一日中就活をしていたのです。エントリーシートを出しても「お祈りメール」が来るだけで、このままでは自分も家族も飢えたまま夜を過ごさなければならぬという不安と悲しみの中にあつたのです。

一方夜明けに雇われた人たちは確かに、まる一日暑い中を辛抱して働きました。神のぶどう園で働くことには苦勞もあります。しかしその苦勞は、一デナリオンが約束されている安心の中での希望ある苦勞です。しかもこの主人は、この世の雇い主のように働きを査定して給料を減らしたり、リストアップするような方ではありません。私たちの働きに応じてではなくて、独り子

この話の結論は「このように、後にいる者は先になり、先にいる者が後になる」です。最後に雇われた者が最初に一デナリオンをもらいました。それはこの一デナリオンが働きに対する報酬ではないことを示しています。神のぶどう園では、働きに応じての報酬という常識的図式は通用しません。働きに対する

イエス・キリストの命をすら与えて下さる気前のよいみ心によって、必要な一デナリオンの救いを与えて下さるのです。このような主人の下で生きることにこそ本当の幸せがあるのだと、主イエスは語っておられるのです。

夜明けから日没までの一日は、私たちの一生でもあります。夜明けとは人生の始めの幼い時、九時は青年期、そして夕方五時は人生の終わり近くです。皆さんが今東北学院大学で学生生活を送っているということは、このぶどう園の主人である神が、朝の九時頃を生きている皆さんと出会い、ご自分のぶどう園へと招いておられるということです。

この世の就活も大きな問題ですが、人生には、もっと根本的で重大な「誰に雇われるか」というテーマがあります。能力や実績によって人を評価、査定するのではなく、一人一人を真実に愛して下さる神のもとで生きる者となることの幸いを知ってほしいのです。

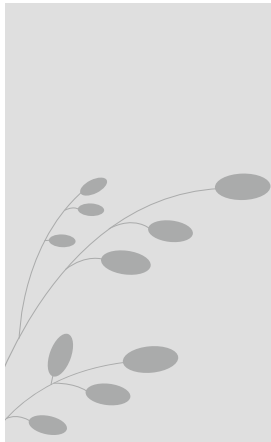
## ◆藤掛 順一 氏

一九五六(昭和三〇)年に生まれる。一九七五(昭和五〇)年神奈川県立湘南高等学校卒業。一九八〇(昭和五五)年東京大学文学部西洋史学科卒業。一九八四(昭和五九)年東京神学大学神学部修士課程修了。

その後、日本基督教団高山総曲輪教会(現・富山鹿島町教会)牧師を経て、二〇〇三(平成一五)年より日本基督教団横浜指路教会牧師として現在に至る。

主な著書として一九九二(平成三)年に『信徒のための改革教会の教理』(全国連合長老会)、二〇〇三(平成一五)年に『教会の制度』なぜ牧師、長老、執事か』(全国連合長老会)を出版。

藤掛先生には、五月二三日(火)に泉キャンパス、一四日には土樋キャンパス(朝)の礼拝をご担当いただきました。





# 「自分の本当の願いを知っていますか」

聖書 ルカによる福音書第19章1～10節



鎌倉雪ノ下教会牧師  
川崎 公平

話したことでしよう。主イエスの声色をまねるようにして物語ったかもしれませんが。ザアカイからその物語を聞いた人たちもまた、今自分を呼んでくださる主のお声を、確かな思いで聴き取ったと思います。

そこで私はふと思うのです。ザアカイの名を呼んだ主イエスのお声。いったいどのような声色だったのでしょうか。

「ザアカイ、急いで降りて来なさい」。そのころを、主ご自身がこう説明しておられます。「人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである」(二〇節)。「人の子」とは、ここでは主イエスのことを指します。人の子イエスがザアカイの家に来た目的は、「失われたものを捜して救うため」。

失うというのは、悲しいことです。日本語の「失われた」という言葉よりも、英語の「miss you」という表現の方がしっくりくるかもしれません。あなたがいなくて悲しい。しかしここで、主イエスは「神の悲しみを語るのです」。「ザアカイ、ザアカイ。やっと見つけた！ 今日、わたしはあなたの家に泊まりたい。なぜかと言うと、あなたが失われているからだ。あなたが神から遠く離れていることが、神にとって、そしてわたしにとって、耐えがたく悲しいのだ。お願いだから、降りておいで」。

「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」。ある伝説によると、のちにザアカイは教会の指導者になったと言われます。繰り返す、この出来事をいろんな人に

もしれません。けれどもまた、喜びにあふれた声であつたに違いない。

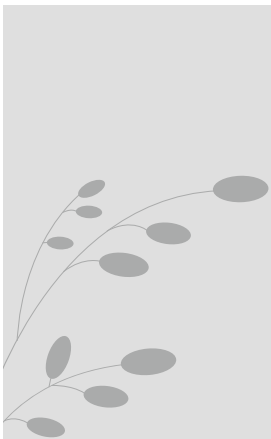
ザアカイは、木の下から自分の名を呼ばれたとき、本当に驚いたと思います。自分のことをこんなに真剣に悲しみ、こんなに喜んでくれた人が、ひとりでもいただろうか。

ザアカイは、急いで木から降りて、喜んで主イエスを自分の家に迎えました。周りの人は驚いて文句を言いました。「あの人は罪深い男のところに行って宿をとつた」。しかし誰よりも驚いたのは、ザアカイ本人だったのではないのでしょうか。なぜ自分はこんなに喜んでるんだらう。この喜びは、いったい何だらう……。自分の心に生まれた喜びに驚きながら、自分の本当の願いに気づいたのではないのでしょうか。そうだとわたしは、このお方に会いたかつたのだ。「ザアカイは立ち上がって、主に言った」(八節)とあります。神の前に、立ち上がったのです。神よ、あなたが探し続けてくださったわたしは、ここにいます。ここに、人間の本当の幸せがあるのです。東北学院大学の皆さまが、神に探され、見出された者として、立ち上がるのができますように。

## ◆川崎 公平 氏

一九七四(昭和四九)年に生まれる。一九九三(平成五)年東京都国立高等学校卒業。一九九八(平成一〇)年東京大学文学部言語文化学科言語学専修課程卒業。二〇〇〇(平成二二)年東京神学大学神学部神学卒業。二〇〇二(平成一四)年東京神学大学院神学研究科博士課程前期課程修了。同年より日本基督教団松本東教会牧師を務める。二〇〇四(平成一六)年東京神学大学院神学研究科博士課程後期課程中退。二〇一〇(平成二二)年からは日本基督教団鎌倉雪ノ下教会牧師を務め現在に至る。

川崎先生には、五月二三日(火)に多賀城キャンパス、土樋キャンパス(夜)の礼拝をご担当いただきました。



## サマー・カレッジ

## 報告

大学宗教学主任 原田 浩司

八月四〜六日の二泊三日の日程で、宮城蔵王ロイヤルホテルを会場に宗教部サマー・カレッジが行われた。主題は「異文化交流とキリスト教の歴史―支倉常長の旅」。参加者は三キャンパスから学生十七名(男子八名、女子九名)と教職員九名だった。

例年、土樋キャンパスで開会礼拝をし、外部講師による講演をおして主題を学んだ後、蔵王のホテルに移動していたが、今回は直ちにホテルに移動し、会場で開会礼拝を行った。四年間皆勤参加の菊池君(人間四年)がマトアイによる福音書七章七〜十二節から、大学生活の中で「求め、探す」ことの大切さを参加者に語り掛けて、サマー・カレッジは開校した。参加者同士が学部や学年を超えてお互いに知り合うことや「アクティブ・ラーニング」も念頭に、学生が語り、学生が運営する、学生主体のや学生の親睦に、初日は時間を割いた。夕食後には、学生が企画した花火大会も行われた。その後、佐々木

宗教部長による「祈り」の講話に耳を傾け、原田宗教学主任が祈りをささげ、一日目を終えた。

二日目の朝、土田君(歴史三年)がマタイによる福音書七章二十一〜二十三節から、相手を思いやる愛の大切さを語りかけて、プログラムははじまった。今年、上級生たちの企画で初めて取り入れられたのが、学生同士が男女二対一で語り合う「ちよつとチャット」の時間。くじで決まった相手を知り、相手を思いやる対話を目指したもののだが、どこもない始まりとなったようだ。

その後、「支倉常長の旅について学ぶ」と題する学びの時。まず二〇一三年に慶長遣欧使節団派遣四百周年を記念して放映された「四百年の旅はるか」の録画を見て、それから出村宗教学主任が映像内容を簡潔にまとめたショートレクチャーを行った。その後、支倉の旅や人生、当時の歴史状況など、それぞれに印象に残る点に言及しながら、グループ懇談の時を持った。

昼食を済ませ、午後には、参加者二回でバスに乗り、「御釜」の見学へ。エメラルドグリーンの見事な湖面を眺め、自然の神秘を経験するひと時となった。ホテルに戻ると、次は体を動かすレクリエーション。男子学生たちはキャッチボールで汗を流し、女子学生たちはビーチボール・サッカーで体を動かし

た。四歳の元気な女の子が「ま〜せ〜て〜」と女子のサッカーに加わり、楽しいひと時となった。

夕食後、教職員も加わり、全員でレクリエーション。例年、上級生たちが司会をつとめ、即興でゲームを作るなど、盛り上げてくれるが、今年も四年生の菊池君が活躍してくれた。その後、北総合人文学科長による夕べの祈りで、二日目を終えた。

三日目の朝は、三浦君(法律一年)による朝の祈りの時。「何事にも時があり」ではじまるコヘレトの言葉三章が、米国人歌手の唄の歌詞で引用されていることを紹介しつつ、「時」の大切さを語り、プログラムが始まった。この日(八月六日)は広島原爆記念日でもあり、野村宗教学主任のリードのもと、一同で平和を祈念し黙祷をささげた。二日目と同様に「ちよつとチャット」。その後、学生たちはグループ別に懇談と討議の時間をもち、昼食に先立ち、長井君(総人四年)による閉会礼拝でカレッジは一旦閉じられた。

だが、今年のメインはここからだ。一同は蔵王のホテルから仙台市博物館へ移動し、学院大OBの学芸員による慶長遣欧使節団についての講演を聴き、そして博物館に常設展示されている使節団ゆかりの品々をゆつくりと見学し、参加者たちは現地で解散した。

今回のサマー・カレッジでは、去年の上級生たちに倣い、四年生たちが積極的にプログラムを運営してくれた。この姿勢が「伝統」となり、次の学生たちへと受け継がれていくことを願う。





## 「異文化交流と

## キリスト教の歴史」

——支倉常長の旅

大学宗教主任 出村 みや子

今年のサマー・カレッジでは「異文化交流とキリスト教の歴史——支倉常長の旅」を主題として、参加者と学びの機会を持った。昨年は伊達政宗が慶長遣欧使節をメキシコおよびヨーロッパに派遣してからちょうど四百年を迎え、遣欧使節に関する出版、報道、講演会や展覧会が開催され、秋には「慶長遣欧使節出帆四〇〇年・ユネスコ世界記憶遺産記念登録」を記念した特別展「伊達政宗の夢 慶長遣欧使節と南蛮文化」が仙台市博物館で開催された。そこで二日目に事前学習を兼ねた講演を行い、三日目に仙台市博物館を訪問して学芸員の講演を聞き、博物館に展示されている関係資料を見るプログラムを企画したので、ここに報告したい。

慶長遣欧使節とは、スペイン領メキシコとの交易と仙台藩内の布教のための宣教師の派遣を求める伊達政宗の命を受け、支倉常長をはじめとする仙台

藩士と従者たち、それに大使で先導役のフランシスコ会宣教師ソテロとスペイン返礼大使のビスカイノら南蛮人を含む総勢約一八〇名の使節団が、慶長一八年九月二十五日（一六二三年一〇月八日）に「サン・ファン・パウテイスタ号」で男鹿半島月浦（現・石巻市）を出帆し、スペイン領メキシコを経て本国スペインへ、さらには教皇との謁見のためにローマまでの旅をし、帰国までに七年もの歳月を要した仙台藩の外交使節のことである。その間に常長一行は行く先々で歓迎され、フェリペ三世らスペイン王侯貴族が列席する中で常長は洗礼を受けるが、日本国内におけるキリスト教禁令政策の進展のために、交易を許可するフェリペ三世の書状を受け取ることはできず、フィリピン経由で失意の帰国をする。

私が担当した講演では、「慶長遣欧使節」に関する映像資料を参照しながら、使節派遣の経緯や、当時のキリスト



教と海外交易をめぐる国内の状況について解説を行った。東日本大震災後には、ちょうど四百年前に起きた慶長大地震と津波に関する過去の資料が見直され、石巻サン・ファン館館長の濱田直嗣氏が、政宗の使節派遣には仙台藩沿岸部における震災からの復興という面もあつたとの説を提起されたので、この説を紹介すると共に、既に鎖国状態となっていた日本に帰国後も常長がその信仰にとどまったかどうかについての最近の研究にも言及した。

三日目の午後には参加者一同で仙台市博物館を訪問し、「伊達政宗と慶長遣欧使節」の講演を聞き、支倉使節に関する展示を見学した。今回講演を担当された学芸員の佐々木徹氏は東北学院の歴史学科の卒業生であり、昨年の特別展の準備のためにスペインやローマを訪れておられ、その際に撮影した映像資料も合わせて見せていただくことができた。

講演は慶長遣欧使節についての解説の他、今回ユネスコ世界記憶遺産に登録された「支倉常長像」、「ローマ教皇パウロ五世像」、「ローマ市民権証書」の三点を中心に、政宗の書状や使節関係者の書簡、スペインのシマンカス文書館やプラド美術館、ヴァチカン・アポストリカ図書館などに収蔵された品々、支倉家が所蔵していたキリシタン



慶長遣欧使節全行程図(仙台博物館「ジュニア版」より)

関係の資料などについて興味深い説明がなされた。外交交渉の成果は得られなかったものの、ヨーロッパに目をむけて東西交流の先駆けとなったサムライたちが仙台の地にいたことを知ることが、現在の私たちが取り組む震災からの復興にとって大きな励ましとなる。

なお、特別展のための図録「伊達政宗の夢 慶長遣欧使節と南蛮文化」(二〇二三年、仙台市博物館の二六二頁以下に「伊達政宗と慶長遣欧使節——大洋の向こうに見た夢」と題する佐々木氏の論文が収録されているので、ご参照下さい。

## サマーカレッジを振り返って 学生たちの声

今回のサマーカレッジを振り返ってみると、「支倉常長」について深く学び、親睦会、御釜湖見学、花火、スポーツ、讚美と証し、グループ討論、ちよっとチャットと、盛りだくさんの楽しいプログラムをこなして、密度の濃い、有意義な三日間を過ごしたという印象をもっています。特に、四年生の学生たちが、最後の機会として会をリードしてくれましたが、これが今回特に好評でした。何度か事前の打ち合わせを行い、細部に学生たちの意見を取り入れてプログラムを作り直しました。

今回参加してくれた学生たちが三日目の最後に提出してくれたアンケートを見ると、とても良い意見が多いが目立ちます。天気がほぼ快晴だったこともあり、景色は美しく、屋外の活動も予定通りにできたことも一因しているようです。

さて、アンケートに記載されている学生の皆さんの声を拾ってみましょう。ほぼ全員一致して口に入っていることは、上述の先輩たちのリードが良かったこと、

二泊三日で八千円という参加費の安さです。もっと周知して多くの人たちに参加を呼びかけたかどうかという声も上がっています。なお、プログラムが多いので、もう少し余裕のあるスケジュールにしてほしかったという声も特に一年生から出ていますが、個人差があるので、すべての人々の要求に応えるのは難しいですね。なお、食事は大変好評で、夕食は一時間半という長さがあったにもかかわらず、もっと長く食事をしながら会話を楽しみたかったという声が上がっています。全体に、よく学び、よく語らい、よく動き、よく食べたというでしょうか。

もう来年に向けて、スタッフは計画を立て始めました。楽しい企画が浮上しています。今回参加した人たちは、先輩として来年ぜひ参加して皆さんをリードし、まだ参加していない人は、ぜひ次回参加しましょう。開催期日は、例年、前期試験の終わった翌日から三日間です。夏休みに入ってしまうので、サマーカレッジの期間としているのは、地方出身の人が早々と帰省したり、それぞれの夏の計画を始めてしまうので、毎年この時期に行っています。では、来年の春の月号、第百三二号に次年度のサマーカレッジの予告が掲載されますので、それをご覧ください。

(大学宗教主任 野村 信)





泉キャンパス

大学宗教主任  
村上 みか



新学期が始まり、また新たな思いをもって勉強や部活動に励まれていることと思います。秋は静かにものを考え、集中するのに良い季節です。この良いときに、ぜひ一度、自分について考え、生きることについて考えるときをもってください。自分がどのような存在であるのか、そしてこの自分がこれからどのようにして社会に出て生きてゆくのか、自分のあり方を模索してみてください。そして何か手がかりがほしくなったときには、ぜひ礼拝や聖書研究会に参加して、聖書の言葉を聞き、先生や学生と話すときをもってください。何かヒントが得られるかもしれません。

礼拝も聖書研究会も、キリスト教学受講者はおちろん、そうでない学生にも開かれています。気がねなく礼拝堂に足を運び、静かな秋のひとつときをお過ごしください。

土樋キャンパス

大学宗教主任  
原口 尚彰



東北学院大学は夏休みをおえて新学期を迎え土樋キャンパスも再び活気を呈して来ました。学生の皆さんは、普段は専門の学びや、クラブ活動や、アルバイトや、就職活動でそれぞれ忙しい時を過ごしていることと思います。キリスト教大学であれば必ず礼拝が行われ、キャンパスライフの中心となっていますが、本学も学期中は三キャンパスにおいて毎日一校時目と二校時目の間の時間を礼拝の時間として守っています。礼拝はキャンパスの構成員全員が、勉強や仕事から一時離れて、神の前に集まって祈る時です。礼拝に参加した者は、様々な聖書の言葉に耳を傾けてその日の主題を共に考え、共に祈りを捧げ、讃美歌を歌い、奏楽のオルガンに耳を傾けることによって、自分を振り返り、平常心を取り戻す貴重な時を与えられます。礼拝の時を通して魂の糧が与えられることを望みます。

多賀城キャンパス

大学宗教主任  
原田 浩司



聖書の最後のヨハネの黙示録の最終章にこの言葉があります。  
「見よ、わたしはすぐに来る。…わたしはアルファであり、オメガである。最初の者にして、最後の者。初めであり、終わりである。」(二一―二四節)。  
季節の変わり目は曖昧で、感覚的には、いつの間にか夏が終わり、いつの間にか秋になっていた感じがします。秋が終わり、冬が来ます。そして冬も終わり、春が巡ってきます。終わりは、意外にも「すぐに来る」ものです。

今年二〇二四年の終わりもだんだん近づいてきます。そう思っているのも束の間、いつの間にか「すぐに来ます」。そして、四年間の大学生活も、いつの間にか終わりがすぐに来てしまうものです。はじめとおわりをしっかりと見据えることから、今を見つめ直すことは人生において大切です。大学礼拝を通して、四年間の学生時代に豊かな四季の彩りを添えていただきたいと思います。

# 秋の行事と予告

実りの秋を迎え、続いてクリスマスを迎える季節が近づいてきました。今後の幾つかの行事についてお知らせします。

## 一、秋季特別伝道礼拝のお知らせ

年に二回、特別伝道礼拝を行います。春は教会に仕える牧師の先生方をお招きして聖書のお話を聞き、秋は社会で活動している方々からお話をお伺いします。今秋の予定です。

### ◆ 泉キャンパス礼拝堂

日時 二〇二四年十月八日(水)  
十時十分～十二時〇〇分

講師 本名 靖氏(東洋大学教授)

### ◆ 多賀城キャンパス礼拝堂

日時 二〇二四年十月八日(水)  
十時十分～十二時〇〇分

講師 野村 正宣氏

### ◆ 土樋キャンパス礼拝堂(昼)

日時 二〇二四年十月九日(木)  
十時十分～十二時〇〇分

講師 本名 靖氏(東洋大学教授)

### ◆ 土樋キャンパス礼拝堂(夜)

日時 二〇二四年十月八日(水)  
十九時三十五分～二十時二十五分

講師 野村 正宣氏

(東洋英和女学院中学部 高等部教諭)

## 二、宗教改革記念日(十月三日)

ドイツのヴィッテンベルク大学の聖書学の教授であったマルティン・ルターは、一五十七年十月三十一日に、免罪符の販売などに関する公開質問状(「九十五箇条の論題」)を聖堂の門に張り出しました。これがかつかけとなって宗教改革が各地に広がり、プロテスタントと呼ばれるキリスト教の新しい教会の群れが誕生しました。私たちの東北学院はこのプロテスタント(福音主義、新教とも呼ばれる)教会の集まりに属しています。当日は大学礼拝やキリスト教学で、この記念日の意義について触れることと思います。

## 三、収穫感謝日(十月第四木曜日)

この季節に世界の各地で秋の収穫のお祭りが行われますが、キリスト教では、特に米国とカナダで盛大に祝われます。その起源は、一六二〇年にさかのぼりますが、メイフラワー号に乗って新天地を求めて旅立った清教徒たちはアメリカ東海岸に上陸しました。しかし移住者の半数が失われるほど過酷な時を過ごし、翌年の秋に収穫が与えられて生き延びることができました。これを記念してお祭りを行います。秋の実りを感謝すると同時に、神に養われていることを覚え、感謝する日です。

## 四、待降節(アドベント)

イエス・キリストの誕生を祝うクリスマス(十二月二十五日)の前の四週間を「待降節」と呼び、その最初の日曜日を待降節第一主日と定め、教会の暦は始まります。キリストの誕生を暗い世界に光が誕生したと聖書では理解するので(イザヤ九・一、ヨハネ一・五)、夜の長いこの時期に光なるキリストが到来したことを祝うのは、時季にならって嬉しいものです。家屋や街路にイルミネーションを飾るといった習慣は日本全国に定着しました。大学での諸行事は左記を参照してください。

## ◆ クリスマス礼拝のご案内 ◆

### ★第二十六回泉キャンパスクリスマス

十二月五日(金) 十八時三〇分

泉キャンパス礼拝堂

#### 第一部

礼拝

説教者：日本基督教団教師

塚本 洋子 牧師

#### 第二部

クリスマスコンサート

クリスマス・メドレー演奏、学生有志合唱団、みんなで歌おう、ギャンドルサービス、他

### ★大学クリスマス

十二月十八日(木)  
泉キャンパス

十時三十分

土樋キャンパス 十二月十八日(木)

十八時三〇分

多賀城キャンパス 十二月十九日(金)

十時三十分

説教者：日本基督教会 蕃山町教会

服部 修 牧師

オラトリオ「メサイア」合唱

### ★第六十三回公開東北学院クリスマス

十二月十九日(金) 十八時

説教者：日本基督教団名取教会

荒井 偉作 牧師

オラトリオ「メサイア」合唱

## 編集後記

秋の号をお届けします。八頁の構成で、カラー印刷も加わり、さらに充実した誌面を目指しました。ところで、学生の皆さんの今年の「秋の実り」はいかがでした。充実した研鑽と学生生活が続きますように願っています。

二〇二四年九月三〇日

東北学院大学宗教部

編集者 野村 信

〒九八〇一八五二

仙台市青葉区土樋丁目三番号